

ネオリベリズムを再審する

都市・空間・統治

10:00 開会挨拶と企画趣旨説明

10:15 第1セッション：問題提起

-10:50 「危機」以後のネオリベリズムと都市
丸山真央（滋賀県立大学人間文化学部・教授）

11:00 第2セッション：都市/空間

-12:30 不動産証券化と都市空間：リーマンショック後の「世界都市」東京
上野淳子（桃山学院大学社会学部・准教授）
「都市空間のネオリベリカル化」を組み直す：プロジェクト型開発と〈都市的なもの〉の
マテリアリティの統治
植田剛史（愛知大学文学部・助教）

12:30 休憩

14:00 第3セッション：政治/統治

-15:30 他者統治と自己統治が重なるとき：薬物使用のハームリダクションをめぐる批判的考察
平井秀幸（四天王寺大学人文社会学部・准教授）
日本版ネオリベリズムの終焉と反復：経済政策と統治性の落差をめぐって
仁平典宏（東京大学大学院教育学研究科・准教授）

15:40 コメントおよび総合討論

-17:00 コメンテーターによるコメント
櫻村愛子（愛知大学文学部・教授）
町村敬志（一橋大学大学院社会学研究科・教授）
総合討論

17:00 閉会挨拶

2018年 9日
12月 9日
10:00~17:00
愛知大学 車道校舎
本館 13階 第3会議室

※ご来場の方は公共交通機関をご利用下さい。

申込不要・入場無料

お問合せ先：愛知大学人文社会学研究所

豊橋市町畑町 1-1 TEL：0532-47-4167

Email：irhsa@ml.aichi-u.ac.jp

URL：http://taweb.aichi-u.ac.jp/irhsa/

ネオリベリズムを再審する

——都市・空間・統治——

2000年代の日本社会の変動を語るキーワードのひとつは、間違いなくネオリベリズムであった。では、現在はどうか。

1990年代半ば以降、バブル経済崩壊後の経済不況が深刻さを増し、既存の制度の機能不全と閉塞がリアリティをもって受け止められるなかで、国家・市場・市民社会の境界再編をともなう構造「改革」の必要性がさまざまな立場から説かれ、それを前提とした新たな主体性のあり方や、その動員/介入に向けた新たな権力作動の様式が構想されてきた。2000年代に入ると、こうしたシステム転換の構想を社会に実装する試みは本格化し、またその帰結も徐々に顕在化しはじめる。

社会保障、労働、都市・空間、市民社会・・・「改革」の帰結がそれぞれの領域において現れはじめるなか、それに対する抵抗の実践や、一連の動向についての批判的分析において、事態の〈全体〉を名指すうえで領域や分野を超えて緩やかに共有されてきたのがネオリベリズム/ネオリベラリカルという視角であった。それはまた、日本社会の経験を先進資本主義社会のグローバルな経験と同じ地平に位置付けるための回路でもあった。こうした視角のリアリティと切実さは、2008年のリーマンショックとその後の危機においてピークに達する。その延長線上において、2011年の東日本大震災後の復興政策もまた、その直後から「惨事便乗型資本主義」という視角から問題化されてきた。

リーマンショックから10年。2012年の政権交代と安全保障政策の転換、東日本大震災後の「国土強靱化」政策と公共事業の再拡充、インフラストラクチャーの輸出と民営化、オリンピックの誘致と都心部再開発、ストリートにおける抵抗の活発化など、必ずしも単一のストーリーには収まりきらない出来事が連鎖する2010年代も終盤にさしかかりつつある現在、ネオリベリズム/ネオリベラリカルという視角には、どのような意味で、またどの程度、事態を捉える力があるのだろうか。

はたしてネオリベリズムは、その適用対象たる〈社会的なるもの〉の存立を不可能にするまでに貫徹したからこそ、それを問題化することの意義も既に失われたのか（または、貫徹したからこそ問題化することの意義が増しているのか）。あるいは、現在もまたネオリベラリカル化のさなかにあるがゆえに、ネオリベリズムという視角の彫琢こそが必要なのか。そもそも異なる領域で同時多発的に進んだ変動をネオリベラリカル化として一括りにしてきたことの得失は、いかに整理されるのか。

本ワークショップは、ネオリベリズムと統治・政治をめぐる諸問題を、都市・空間・市民社会、あるいはより具体的な施設など、幅広いフィールドに立脚しつつ2000年代から研究してきた第一線の研究者を招へいし、ネオリベリズムの現在について領域横断的な議論を試みる。

登壇者プロフィール（登壇順）

- ・丸山 真央
滋賀県立大学人間文化学部・教授。専門は政治社会学、都市研究。主著に『平成の大合併』の政治社会学——国家のリスケーリングと地域社会』（2015年 御茶の水書房）。
- ・上野 淳子
桃山学院大学社会学部・准教授。専門は都市社会学。論文に、『世界都市』後の東京における空間の生産——ネオリベラリカル化と規制緩和をめぐる（2017年『経済地理学年報』63(4)）、「東京都の「世界都市」化戦略と政治改革——開発主義国家がネオリベラリカル化するとき」（2010年『日本都市社会学年報』28）など。
- ・植田 剛史
愛知大学文学部・助教。専門は社会学・都市研究。論文に「高度経済成長期における『都市計画コンサルタント』の形成」（2008年『日本都市社会学年報』26）など。
- ・平井 秀幸
四天王寺大学人文社会学部・准教授。専門は社会学。主著に『刑務所処遇の社会学——認知行動療法・新自由主義的規律・統治性』（2015年 世織書房）。
- ・仁平 典宏
東京大学大学院教育学研究科・准教授。専門は社会学。主著に『「ボランティア」の誕生と終焉——〈贈与のパラドックス〉の知識社会学』（2011年 名古屋大学出版会）。
- ・櫻村 愛子
愛知大学文学部・教授。専門は精神分析学・社会学。主著に『臨床社会学ならこう考える——生き延びるための理論と実践』（2009年 青土社）、『ネオリベリズムの精神分析——なぜ伝統や文化が求められるのか』（2007年 光文社）など。
- ・町村 敬志
一橋大学大学院社会学研究科・教授。専門は社会学・都市研究・エスニシティ研究。主著に『開発主義の構造と心性——戦後日本がダムでみた夢と現実』（2011年 御茶の水書房）、『「世界都市」東京の構造転換——都市リストラクチャーリングの社会学』（1994年 東京大学出版会）など。